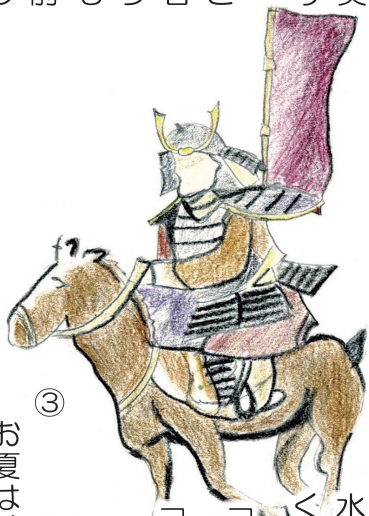


① 今からおよそ七百年ほど昔、都から、泉州水間村に伏見天皇のつかいとして山名清十郎という武士が一行を連れてやってきました。清十郎はたいそうな美男子で、武術にもたけておりました。

この一行のもてなし役として、水間村の農民、楠右衛門の長女で、お夏という娘が選ばれました。お夏もまた、近隣の村にまで名前が知られるような美女でした。



② 一行のお世話をすまううちに、清十郎とお夏は、どちらからともなく心ひかれるようになっていきました。しかし、与えられた任務が終わると、一行は水間村から都へと引き上げていくのでした。

「お夏、世話になったな。」

「清十郎様……。」

③ お夏は、都へ帰った清十郎のことをどうしても忘れることができません。

そこで、縁結びの仏様である、水間寺愛染堂の明王さまに、毎晩お参りに行きました。

「清十郎様と、もう一度お話ができますように。」

そして、境内の椿の枝に「お夏清十郎」と書いた紙を結びました。この椿は、紙に男女の名前を書いて結ぶと、願いがかなうという言い伝えがあったからです。

でも、お夏の願いはかなえられないまま、月日は流れました。

『お夏清十郎物語』

～貝塚に伝わる民話～



この話が、人々の口から口へと伝わり、お夏の耳にも入ってきました。お夏は、**とるもの**もとりあえず、戦場へと向かい、清十郎を探しながら歩きまわりました。

「どうか、どうかご無事で」

くる日もくる日も、お夏は清十郎のことを人々に尋ね歩きました。そして、住吉（現在の大阪市内）の松林で、ついに清十郎と再会しました。

二人は再会を喜び、水間村へと帰りました。その後、二人はひっそりと仲むつまじく暮らしました。

※とるものもとりあえず
大急ぎでという意味



⑤ 今も、水間寺愛染堂には、縁結びの仏像がまつられており、近くに、お夏清十郎のお墓があります。

二人が仲良く暮らしたその場所には、縁を求めてたくさんの人々が、お参りに訪れているのです。

